

# SHIGA SDGs Studios Booklet 2022



びわ湖から考える、滋賀の食と地産地消

つながるしが、  
つなげるワタシ

# SHIGA SDGs Studios とは

「SHIGA SDGs Studios+(PLUS)2022」は、環びわ湖大学・地域コンソーシアムに加盟する大学の学生が、滋賀県内のSDGsの実践者、企業やNPOの方にインタビューを行い、記事を執筆。最終成果として、ブックレットやSNS、Web、動画で発信をする一連のスタディープログラムです。大学や学部・学年の異なる仲間とともに、今年度は、「びわ湖から考える、滋賀の食と地産地消」をテーマに活動をしました。

## CONTENTS

---

What is SDGs?	04
一般社団法人 環びわ湖大学・地域コンソーシアムとは	06
SHIGA SDGs Studios+(PLUS)2022での取り組み	07
びわ湖から考える、滋賀の食と地産地消	13
Interview -参加学生の声-	26
環びわ湖大学SDGsマップ2022	30
Message	34



# What is SDGs? SDGsとは

SDGs（持続可能な開発目標:Sustainable Development Goals）とは、環境や貧困といった人類共通の課題解決に向けた、2030年までに持続可能でよりよい世界を目指す国際目標です。

これは「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ」の具体的な行動指針であり、地球上の「誰一人取り残さない」をスローガンとして、2015年9月の国連サミットで全会一致で採択されました。

## SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



SDGsをもっとよく知る>>  
 国際連合広報センター（日本語ページ）  
<https://www.unic.or.jp/>



滋賀県のSDGsの取り組み>>  
 SDGsの普及および実践に係る滋賀の取組  
<https://www.pref.shiga.lg.jp/kensei/gaiyou/sdgs/>

SDGsは17のゴールと169のターゲットから構成されています。それぞれ貧困や格差をなくすことと、将来の世代も限りある資源を活用できるように開発を進めることを目指した、全世界が取り組むべき目標です。よって、先進国も発展途上国も国際的に連携して、2030年までの目標達成に向け努力しなければなりません。

SDGsは、2030年までの社会課題解決のゴールです。もし今あなた18歳であれば、2030年には26歳。つまり、SDGsが目指す2030年では、今の若者が社会の中心を担う世代となります。私たちは、SDGsを達成するために、社会課題の解決を担える人材の育成が必要不可欠だと考えています。

## 滋賀県とSDGs

2017年1月、滋賀県は全国に先駆け、SDGsを県政に取り込むことを宣言しました。

2019年には滋賀県が、2020年には湖南市がSDGsの達成に向け優れた取組を進める「SDGs未来都市」（内閣府）に選定されました。

2021年には、滋賀SDGs×イノベーションハブが地方創生SDGs官民連携プラットフォームの優良事例に選定されました。

滋賀県は、琵琶湖を健全な姿で次世代に引き継ぐため、琵琶湖の環境にやさしい石けんを使う「石けん運動」を行うなど、官民挙げて環境保全に熱心に取り組んできた地域です。また、中世以降全国で活躍した近江商人の「三方よし（売り手よし、買い手よし、世間よし）」の精神や、戦後日本の「障害福祉の父」と呼ばれる糸賀一雄氏の「この子らを世の光に」という思想を受け継ぎ、実践してきた土地でもあります。こうした、滋賀県に息づく、経済・社会・環境の調和につながる考え方は、SDGsの精神と合致するものです。

滋賀県は、県の政策にSDGsの視点を活用するとともに、経済界、大学等多様なステークホルダーとのパートナーシップを拡大しており、県内では、SDGsの達成に向けた様々な取組や新たな連携が次々と生まれています。

### SDGs未来都市 滋賀県

#### 「世界から選ばれる『三方よし・未来よし』の滋賀の実現」



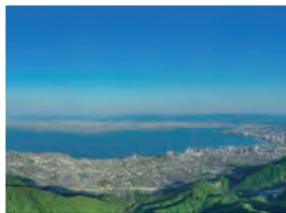
近江商人の「三方よし」の精神

近江商人の経営哲学のひとつで「売り手よし、買い手よし、世間よし」を示す表現。自らの利益のみを追求することをよしとせず、社会の幸せを願う精神がSDGsに通じている。



石けん運動

1970年代、琵琶湖に淡水赤潮が発生。住民自らの手で琵琶湖を守るため「合成洗剤をやめ、粉石けんを使おう」という県民運動が展開された。



琵琶湖

多様で豊かな生態系や歴史・文化を育み、近畿圏約1,450万人の生活と産業を支える国民的資産。治水機能、観光資源など様々な役割を担っている。

一般社団法人

# 環びわ湖大学・地域コンソーシアムとは

びわ湖を取り巻く大学と自治体・経済団体が連携して共に活動しています。

滋賀県内には14の大学・短期大学があり、およそ35,000人の学生が学んでいます。本コンソーシアムは、大学・短期大学、自治体、経済団体、地域の連携を基盤にして、会員同士が相互に連携・協働し、地域社会の発展と魅力ある大学づくりを目指して活動しています。

大学地域連携課題解決支援事業、学生支援事業、留学生事業、就職支援事業、単位互換事業の5つの事業により、県内大学、学生と企業、NPOなどの非営利法人や地域住民の方々とより連携を深めるため、多種多様な地域連携事業を展開しています。



SUSTAINABLE  
DEVELOPMENT  
GOALS

環びわ湖コンソーシアムは、持続可能な開発目標(SDGs)を支援しています

2015年9月の国連サミットで採択された持続可能な開発目標(SDGs)の趣旨に賛同し、滋賀県における普及推進に向けて、各大学等で取り組む学生活動について情報共有するとともに、県内の大学等や学生が連携した取り組みを行います。

## 正会員 大学・短期大学

滋賀大学	長浜バイオ大学
滋賀医科大学	びわこ成蹊スポーツ大学
滋賀県立大学	びわこ学院大学・びわこ学院大学短期大学部
龍谷大学	びわこリハビリテーション専門職大学
立命館大学	滋賀文教短期大学
成安造形大学	滋賀短期大学
聖泉大学	放送大学滋賀学習センター

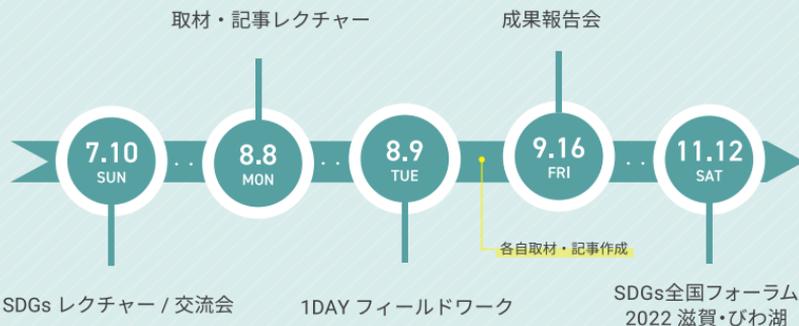
## 正会員 自治体・経済団体

滋賀県	草津市
大津市	甲賀市
彦根市	東近江市
長浜市	滋賀経済同友会

# SHIGA SDGs Studios

「SHIGA SDGs Studios+(PLUS)2022」では、滋賀県を中心に様々な活動に取り組む民間企業やNPOの方に参加学生がインタビューを行い、SDGsの観点から記事を執筆。最終的に、成果物を冊子やメディア、Web、動画で発信します。インタビューの前にはSDGsや取材・記事作成のレクチャー、滋賀県内のフィールドワークを行います。大学や学部・学年の異なるチームメンバーとともに、SDGsを学び、社会課題を知ることや、取り組みを発信する楽しさを体験するスタディープログラムです。3年目となる今年度は、「びわ湖」「食」「地産地消」の視点を盛り込み、「びわ湖から考える、滋賀の食と地産地消」をテーマとして、レクチャーやフィールドワークを対面で行いました。

## 全体スケジュール



# DAY1

## SDGsレクチャー/交流会

7月10日(日) @環びわ



SDGsレクチャー 講師

一般社団法人インパクトラボ代表理事

上田 隼也氏

立命館大学卒。一般社団法人インパクトラボ代表理事。学生時代からSDGsに実践的に取り組み、立命館大学で日本初の学生主体のSDGsイベント「Sustainable Week」を立ち上げる。現在は立命館起業・事業化推進室プログラム・オーガナイザーを担当しながら、教育現場でも実践に取り組む。

### プログラムスケジュール

- 13:00 オープニング・プログラム紹介
- 13:10 自己紹介・アイスブレイク
- 13:30 SDGs レクチャー・ワークショップ
- 14:20 交流会
- 15:00 事務連絡・終了



DAY1では、まずグループで自己紹介・アイスブレイクを行い、出身地や滋賀への想い・滋賀のイメージなどを共有しました。参加者の緊張がほぐれたところで、一般社団法人インパクトラボの上田さんによるSDGsレクチャーを行いました。ワークでは、滋賀県やSDGsで連想されるものを付箋に書き出しました。その後、SDGsの成り立ちやSDGsと滋賀県の取り組みについて学び、参加者がこれからの活動をするにあたって、達成目標を共有しました。



# DAY2

取材・記事レクチャー

8月8日(月) @環びわ



発信スキル講座 講師

一般社団法人インパクトラボ理事

吉武 堯氏

立命館大学新聞 2018 年度元主幹 / 現アドバイザー。高校から学生新聞に携わり、高校・大学を通じて記者・編集者として活動。その他イベント企画・運営や広報担当など、ディレクター・デザイナーとして活動し、グラフィックデザインを専門としている。

## プログラムスケジュール

- 13:00 オープニング・趣旨説明
- 13:10 取材講座①心構え・取材の仕方
- 13:40 ペアワーク
- 14:20 取材講座②記事の書き方
- 14:40 取材講座③写真の撮り方
- 15:30 質疑応答・事務連絡
- 15:40 DAY3 事前学習・終了



DAY2では、グループで活動を円滑に進めるためにアイスブレイクを行いました。その後取材・記事レクチャーとして、一般社団法人インパクトラボの吉武さんに、取材の調べの重要性や取材の流れなど、本プログラムの成果物作成に必要な知識をレクチャーしていただきました。その後は、8月中旬から9月上旬にかけて行う取材活動のグループ発表があり、取材先の候補をグループ内で出し合い、取材先の決定を行いました。

# DAY3

1DAYフィールドワーク

8月9日(火) @沖島(近江八幡市)



## フィールドワーク ゲスト

近江八幡市沖島町地域おこし協力隊  
琵琶湖と、タパス。

川瀬 明日望氏

大学卒業後、飲食店を経営する会社に就職し働く中で、地元の食文化に興味を持ち、離島“沖島”に移住を決意した。現在は近江八幡市沖島町地域おこし協力隊として、沖島に移住し活動をしている。活動内容のひとつとして、「琵琶湖と、タパス。」という活動名で、滋賀県の琵琶湖で獲れた魚(湖魚)を使ったメキシコ料理をマーケットなどで提供している。

## プログラムスケジュール

- 10:30 チェックイン
- 11:00 フィールドワーク
- 12:30 昼食
- 13:00 インタビュー
- 14:30 振り返りワークショップ
- 15:30 質疑応答・事務連絡
- 16:00 終了



1DAYフィールドワークの午前は、「沖島まるごと散策」と題して沖島のマップを見ながらグループで散策を行いました。沖島小学校や沖島展望台など沖島の魅力を存分に感じる場所を巡りました。そして、昼食は湖島婦貴の会で提供している湖魚を使用したお弁当をいただきました。湖島婦貴の会の方にお弁当に入っている食材やメニューの紹介もしてもらいました。



1DAYフィールドワークの午後は、近江八幡市沖島町地域おこし協力隊の川瀬さんをゲストにお招きし、沖島の魅力や地域おこし協力隊としての川瀬さんの活動などのお話を伺いました。川瀬さんが制作された沖島の漁業に関する動画を鑑賞しながら、湖魚を使ったメキシコ風の手作りナチョスをいただきました。質疑応答では、川瀬さんの原動力が「他の人に先を越されたくない」という気持ちであると知り、参加学生の良い刺激になりました。



# DAY4

成果報告会・  
振り返りワークショップ

9月16日(金) @環びわ



## プログラムスケジュール

- 13:00 挨拶・プログラム紹介
- 13:15 記事発表・質疑応答
- 14:15 講評
- 14:30 休憩
- 14:40 振り返りワークショップ
- 15:55 写真撮影・事務連絡
- 16:00 終了

成果報告会には、環びわ加盟大学や自治体からオーディエンスとして参加いただきました。発表は6チームが行い、菜種油を使って資源を循環させている方や漁業をしている方など取材で学んだことやSDGs視点で考えたことを発表しました。発表の最後にはオーディエンスの方からの講評があり、良かった点や記事の改善点など

これからの活動に繋がるアドバイスをいただきました。その後、「学生による滋賀のSDGsや地域の魅力の発信」をテーマに振り返りワークショップを実施しました。付箋と模造紙を使いながら、SDGsのゴール17個を全て書き出し、これから探究したいキーワードとの繋がりを考えるなど、これまで学んできた中で感じたことの言語化を試みました。

# DAY5

SDGs全国フォーラム  
2022 滋賀・びわ湖

11月12日(土) @ヒアザ淡海

SHIGA SDGs Studios+(PLUS)2022に参加した学生は、SDGs全国フォーラム2022 滋賀・びわ湖の学生実行委員会の一員としてポスターセッションに参加します。参加者が執筆した記事をSDGsに興味・関心のある方に発信する機会として、全国から集まる自治体関係者、研究者、企業の関係者、同世代との交流や意見交換を通して、参加者のこれからの活動が発展することを期待します。

# びわ湖から考える、 滋賀の食と地産地消

大学や学部・学年の異なるチームメンバーで構成された参加学生が、「びわ湖から考える、滋賀県の食と地産地消」をテーマに滋賀県で特色あるSDGsに関する取り組みを行う企業や個人を自分たちで選び、インタビューを行い、記事を執筆しました。

Team1	<b>醗酵で広がる、人の輪と食の可能性</b> 長浜市/ハッピー太郎醸造所	14
Team2	<b>多様性が認められた社会へ</b> 甲賀市/COCCALA BAKE & CAFE	16
Team3	<b>菜の花と地域の輪</b> 東近江市/NPO法人愛のまちエコ倶楽部	18
Team4	<b>人と土地が織りなす物語を次の世代へ</b> 彦根市/株式会社彦根麦酒	20
Team5	<b>バイオパワーで地域内資源循環</b> 草津市/株式会社バイオセラー	22
Team6	<b>琵琶湖にしかない風景をいつまでも</b> 大津市/フィッシャーアーキテクト	24



# 醗酵で広がる、人の輪と食の可能性

～生産者の想いとしあわせを、消費者に伝えることを目指して～



ハッピー太郎醸造所

取材・記事/Team1 宇都宮 和・帥 靈・梅田 混基

琵琶湖に夕日が映える8月下旬の夕方、私たちは滋賀県長浜市の観光名所「黒壁スクエア」の外れにある、「湖のスコーレ」を訪れた。ここではショップやストア、体験会やイベントスペース等が設けられており、訪れた人々が生産者や作った人の想いや願いに触れたり学んだりすることができるような施設となっている。

施設内にあるハッピー太郎醸造所店主の池島さんは「想像していたより若い人たちが来た！」と笑顔で私たちを迎えてくださった。施設内で製造した醗酵食品や滋賀県産の食材を使用した料理が味わえる喫茶室で、池島さんの考える醗酵の魅力についてお話を聞いた。インタビューを通して、池島さんの醗酵と琵琶湖に対する熱い想いを知ることができた。

## 人々をつなぐ道具 「醗酵」

池島さんは、これまで田舎と都会の暮らしを経験する中で「農家から加工品、そして、消費者まで届く点が現実には断絶している」ことに気づいた。農家は、多くの苦勞や疲勞を感じながら農業を行う。時には台風などの自然災害に見舞われ作物が全滅し、絶望することもあるそうだ。だがその分、作物が無事に完成したときの達成感や無農作物を作ることに對する覚悟や気力は計り知れないものであるだろう。しかし、加工品に至るまでのそうした苦勞や農家の

想いが、消費者には伝わり辛いという現実がある。値段・生産量・品質など「数字」で表されるものでしか人々に判断されないのだ。

池島さんは「それでも無農薬作物を作りたいという志を持つ農家を見守りたいんです。」と語る。どんな食品にも、それぞれが作られるまでの過程があり、多くの人々が関わっている。

また、消費者にも無農薬作物を使用した食品を使いたいというこだわりを持つ人々も多くなる。小さな子供を持つ母親や患者など、健康的で安心できる食材を使った食事を摂りたいと思人々たちだ。

誰かのために何かをしてあげたいと願う純粋な気持ちは、農家も消費者も変わらない。池島さんは、そのような人たちの想いや願いを、生産者や消費者との間に立つ存在である醸造家として伝え、つながりを深めたいと考える。

ハッピー太郎醸造所のコンセプトは「酔醉でつなぐ、しあわせ。」消費者に生産者の想いをいかに魅力的に伝えるかを考え、日々事業に取り組んでいる。

## 心境の変化

池島さんは以前、麹作りは寝る間を惜しんで頑張れば良いものが作れると思っていたと話す。しかし「年齢を重ねると思う部分もあり、また、『自分、麹作り頑張ってますよ』とアピールを周りの人にしていたので、

同業者との良い人間関係を築けなかった。」という。池島さんは当時を振り返り、「見栄を張っていた」と語る。そこには、認められたい思い、満たされない思いがあった。やがて、心境の変化が起こり、麹作りは健康的で楽なやり方で作る方が良いと考えるようになったという。例えば、甘酒を作るとき、琵琶湖の風景、匂い合うかどうか考えて作る。「いかにして酒や味噌を簡単に作れるかどうか試行錯誤し、特別な専門知識がなくとも、誰でも麹を使った商品を作ることが可能な製法にしたい」という。これには、人を育てたいという池島さんの思いがある。将来的には次世代の醸造家を見つけないと話す。引き継ぎがしやすい工夫として平易な作り方を編み出す努力をしている。

## ラベルから学んだこと

ハッピー太郎醸造所では『どぶろく』の醸造に挑戦している。どぶろくとはお米丸ごとお酒だ。通常のお米の酒は、酒粕とお酒で分離する。どぶろくでは、それらを丸ごと飲んでしまうというものだ。現在、甘口と辛口の2種類があり、狐の姿を示すラベルが貼られている。狐は田んぼの守り神だ。写真では左は可愛らしいメスを表すので甘口、右はキリッとしているオスなので辛口としたという。ラベルのデザインは切り絵作家の早川鉄平さんが考案したものだ。どぶろくは最初から甘口辛口の2種類の味

があったわけではなかった。最初はメスの甘口の1種類だけであった。デザインのチームとも相談しながら、オス・メスの両方あった方が面白く、ラベルが生かされると考えて2種類にした。酔醉を通してたくさんの人と交流する中で、創造が苦手だと話す池島さんでも面白いことができるようになったのだと話す。今回は、早川さんにラベルのデザインを頼んで、オリジナルに富んだ面白い酒を作った。「特別な人だけができる仕事ではなく、いろんな人に助けてもらうことで、楽しい仕事ができると学んだ。」と仕事の面白さを語ってくれた。

## ハッピー太郎醸造所

### 池島 幸太郎さん

手作り麹、滋賀の無農薬栽培の作物を使った味噌やどぶろく等を作る醸造家。イベント出店や体験会を通して、酔醉や麹の魅力を伝える活動もしている。



狐の姿のラベルが貼られた『どぶろく』

### 取材者

宇都宮 和 (滋賀大学1年生)  
帥 霊 (立命館大学3年生)  
梅田 凜基 (立命館大学1年生)



# 多様性が認められた社会へ

～食を通じた障がい者支援と人々のつながり～



## COCCALA BAKE & CAFE

取材・記事/Team2 占野友梨佳・塩原和華・佐藤龍斗

滋賀県甲賀市にお店を構えるパン屋、COCCALA BAKE & CAFE。地元の食材を使い、素材にこだわりながら日々パンを作り続けている。

このパン屋の大きな特徴は、お店を含め、周辺にあるデイサービス、グループホーム、保育園など、甲賀いこいの村という福祉エリアの施設となっていることである。その中でも、COCCALA BAKE & CAFEは、パン屋でありながらも、就労継続支援B型の施設という面を併せ持っている。障害を持った方が、やりたいことができるよう、居場所や働く機会などを提供しているのである。食と福祉という組み合わせ。この裏には、どのような思いがあるのだろうか。私たちは代表の田畑さんにお話を伺った。

### 心地よい場所づくりのために

前のオーナーから引き継いだというパン屋さん。元々は田畑さんが建築で携わり、このお店を建てたそうだ。引き継ぎきっかけとなったのは少子高齢化の問題や障害を持った方が心地よく過ごせる場所を作り、「仕事をしたい」と思っている方の働きたい気持ちを無くしてしまうことだけはやめよう」と思ったことがきっかけだと田畑さんは話す。

障害を持つ方の支援として「就労継続支援B型」を取り入れている。出来ないことがあった

時に乗り越えて欲しいという思いがあるため、日々厳しい声をかけることもあるが、そこには障害を持った方の将来を考えてのことであると話す。

現在の事業では、補助金が一切出ない状態で支援を行っているという田畑さん。そのような中で事業を続けることに対して「利用者の人のためになるなら自分たちが頑張ったらい」と話す。

話を聞く中で熱心な気持ちを持って支援に取り組んでいることが伝わり、特に「あきらめなければ失敗ではない」という言葉は、取材を通して私たちの心に響いた。

## 未来を見据えて

障害を持つ方の支援をする上で、難しいと感じる点について聞くと、利用者の方と保護者の間にギャップが生まれることだと田畑さんは話す。もちろんどちらも本人を大切に考えているという点においては同じ思いだが、厳しい言葉をかけることもあるため、接し方に関するところで考え方に違いが生じることもあるようだ。

ギャップという点に関しては、現代社会においても同様のことが言えるだろう。障害といてもさまざまな種類があり、多くの人が何から障害を抱えているという。その多様性を認めたと上で、偏見を持つのではなく、それぞれの才能や良いところを見ようとするとする人が増えてほ

しい、という田畑さんの思いが、当たり前となる日が来ることを願っている。

## スペースを越えた地域貢献

現在 COCCALA BAKE & CAFE では、地域をつなぐ交流の場として店舗のスペースをイベントやレンタルスペースとして貸し出しを行っている。しかし実際は、イートインスペースとして利用されることが多く、このスペースだけを使った地域交流はほとんど行われていない。

田畑さんは、近くにある保育園やデイサービスとの交流を大切にしている。保育園の給食に



パンを提供する、デイサービスの方にパンを販売するなど店内スペースだけで交流を完結させない取り組みを行っているという。スペースを越えた地域交流を通じて、「昔のように、初対面の人でも助け合う関係を作りたい。」と声を弾ませる。きつとこの思いの強さが、現在の地域交流の原動力になっているだろう。

### COCCALA BAKE & CAFE

#### 田畑 義和さん

ミライキックス株式会社代表取締役社長。もともとは建築業中心の生活を送っていたが、地元の企業としてさらに踏み込んでいきたいという思いから、障がい者支援も進めている。さまざまな困難を乗り越え、自ら動くということを大切にし、社長である今も働く姿を見せ続けている。



#### 取材者

占野 友梨佳 (龍谷大学 1年生)  
塩原 和華 (立命館大学 2年生)  
佐藤 龍斗 (滋賀大学 1年生)



## 菜の花と地域の輪

～さまざまな取り組みからより良い環境を～



NPO法人愛のまちエコ倶楽部

取材・記事/Team3東 将大・中野 葵土

### 菜の花エコプロジェクト

私たちは菜花ね油の製造をされているNPO法人愛のまちエコ倶楽部の伊藤真也さんの元を訪れた。インタビュアでは菜花ね油の魅力や製造方法、地域での取り組みなどについて聞くことができた。ここでは私たちの知らない世界をたくさん教えていただいた。その内容はどれも興味を惹くものばかりだった。

伊藤さんは東京のレストランで7年働き、ニュージーランドへの旅から帰ったあとと自分何ができるかと考え、現在は菜の花館で働いている。そこでは主に持続可能な暮らしを目指して「菜の花エコプロジェクト」の実践を行っているという。「転作田に菜の花を植え、菜花ねを収穫し、搾油して菜花ね油に」。一見、資源が循環されず、不可逆的な取り組みに感じるがすべてが循環する取り組みなのだという。菜花ね油は食用油として学校や飲食店に利用され、廃食油として回収したものをバイオディーゼル燃料を製造。その燃料で農業機械を動かす菜花ねを栽培することができる。現在、愛知県にはバイオディーゼル燃料専用のガソリンスタンドがある。300円/Lと高価ではあるが、企業が使うことで環境への取り組みに対してのアピールにも繋がっている。廃食油をリサイクルすることで、可燃ゴミの減量とCO2排出量の削減に繋がっている。また食用の菜花ね油は、年に一度の学校給食を通し、地産地消環境学習として伝えられている。一方で、伊藤さんは「天候による影響で作物の育ちが毎年安定する

わけではないため予定通りにならないことも多い。さらに農家やお客様の繋ぎ役として間に入ることが多く調整が難しいといった面もある」と話す。環境にやさしいという反面どうしても手間がかかってしまう。それでも、「直接的にお客様に商品を使っていたりしているという実感を持つことができる」とや地域との協力ができるといったやりがいがある」と伊藤さんは語る。

## 菜たね油「菜ばかり」

たくさんの工程を経て大切に製造されている油「菜ばかり」。一般に売られているサラダ油などに比べ、体に良い成分が豊富に含まれているのが大きな特徴である。コロナ禍により自宅で作理する人が多くなった今、ローカルで作り手の顔が見える点により注目を浴びている。味に関しては一般的なサラダ油に比べ、菜種特有の苦味が少しありコクのある味わいだ。そのため料理に使う量も少量で済む。製造過程では一般のサラダ油は薬剤抽出や脱色が行われているのに対し、「菜ばかり」は無添加、压榨搾りのため安心安全でもある。

## 土と暮らしていこう

菜の花館がある東近江では地域のモットーとして「FEEC」(food・energy・care)で自立する地域を目指している。そのため的手段として地産地消などがあり、その取り組みとして活動が行われている。例えば地産地消や農家民泊や農業・里山体験が挙げられる。コロナ前の農家民泊では年間約1500人の宿泊者が滞在し、東近江市内の

50軒ほどの家庭が農家民泊として利用されているという。宿泊者は個人や団体、修学旅行生の他、海外から訪れるお客様もいる。農業&里山体験では、参加費を払い田んぼや農園などを借りて1年間自分でおみや果物を育てることができるといった体験だ。農家のサポートを受けながらできることや、自然にたくさん触れて自ら育てた作物を収穫することが大きな魅力だ。そこで興味を持ち、新たに農業を仕事にする人もいうという。「東近江に住みながら働きたい」という方を支援する空き家サポートも行政とともに取り組んでいる。コロナ禍の新たな取り組みとしてこれまで行ってきた就農・移住支援の輪を広げ、地域の空き家



## NPO法人愛のまちエコ倶楽部 伊藤 真也さん

農に携わる仕事をとの思いから5年前に愛のまちエコ倶楽部スタッフに。お隣の三重県から通っている。元々料理関係の仕事に就いていた。好きな食べ物はお米である。



を活用し、農業体験とセットで宿泊できる施設であり、キッチンやスペースをレンタルできる「だれんち」をオープンさせた。「今後東近江に移住したい方、就農を目指す方、農ある暮らしに触れてみたい方など誰もがここで地域と繋がりがながらこれらの暮らしをゆっくりしていくことができる、それなら場所になってもほしい」と伊藤さんは語る。東近江市ならではの特徴を生かし魅力的な取り組みがたくさん行われている。

## 取材者

東 将大 (聖泉大学 1年生)  
中野 葵士 (聖泉大学 1年生)



# 人と土地が織りなす物語を 次の世代へ

～地域の食、地域の人、そして地域の歴史を  
“サイクル”させられるブルワリーを目指して～



株式会社彦根麦酒

取材・記事／Team4 高田元貴・中田名帆子・市田唯昂

## 好き、を仕事に

暑さもピークを迎えた8月下旬、彦根市石寺町にある、クラフトビール醸造所「彦根麦酒」の営業ディレクター・ブルワーである豊村美久さんを訪ねた。豊村さんは彦根の特色を引き出すクラフトビール作りに携わっている。今回のインタビューでは、彦根麦酒で勤めるきっかけや、Uターンして認識した彦根の魅力や思いなどについてお話を聞いた。

インタビューを通して、地産地消から広がる人とのつながりを知り、視野が広がった。一度滋賀県を出ても戻ってきたくなる魅力を体感できた。

豊村さんは彦根市出身で、長年大阪で働いていた。しかし、ビールが好きで彼女は地元でクラフトビール醸造所ができたことを知り、帰省時に訪問。すぐにその世界観に魅了され、ご縁があつて彦根麦酒へ。他県に行ったことで地元の良いところを再認識したことも理由の一つだという。滋賀県には他にはない人とのつながりがある。また、東京から移住した人の中からは、「引越してすぐに大雪が降り、とんでもない場所に来てしまったと最初は思ったが、ゆったりとした時間を過ごすうちに彦根を選んで良かった」との声も。都会から来た人にも受け入れられる魅力があるのである。

彦根麦酒は、非農用地の活用から生まれた。

地元の集落、大学、企業が連携し、地域コミュニティを次世代に繋いでいくこと、彦根産原料100%のクラフトビール作りを目指している。

現在は麦芽かすを活用する仕組みづくりに力を入れているそうだ。「この地域にフードロス

削減の思いを同様に持つ人がたくさんいるとわかると嬉しい」と豊村さんは話す。大学時代、学外での活動に力を入れていたという豊村さんは「迷ったらやる」を意識し、興味のあることに全力で取り組んだ。「その結果として大切な人と多くなりがりできた」と話す。

豊村さんの彦根愛、地産地消の認識、姿勢があるからこそ、1300年前から変わらない石寺町の景色を次世代の地域コミュニティが繋いでいくだろうと取材を通して感じた。

## フードロスの削減へ 麦芽かすの再利用へ

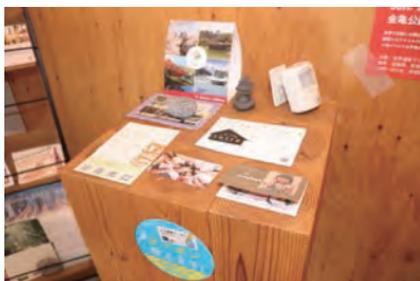
彦根麦酒では、廃棄物を簡単に出さないアップサイクル実現に向けた取り組みが行われている。その一例が、麦芽かすの再利用だ。ビール製造で使われた麦芽の搾りかすは、飼料、お菓子、グルノーラに再利用できるように努力がなされている。麦芽かすは栄養価が高く捨てるのがもったいない。

この麦芽かすの取り組みについては、地元の食材を活かし、「食」で本物の健康と美を追求されている事業者の方々から、賛同していただいている。事業者とのご縁は、彦根麦酒スタッフの繋がりがきっかけだそう。その事業者に彦根麦酒の麦芽かすを有価物として引き取ってもらい、クッキーやクラフトビールのおつまみとして最適なチップスなどに加工していただいている。醸造所で開催しているイベントにも出店されており、お客様にも好評でいつも完売状態。今後はその商品を定番化させて販売していきたいと話す。

「醸造所」にいると、このように私たちの事業に共感いただける繋がりがやご縁が広がっていくこと

も日々実感し、魅力だと感じるものの一つです」と話す。

麦芽の再利用だけでなく、他にも建物の構造、節水の排水設備、エコバックやエコボトルの推奨など環境に配慮した多様な取り組みが行われている。



入口には訪問された地元企業の冊子が置かれており共に地域を盛り上げようとする意志が感じられる

## 個性を醸し出す

それぞれの地域の特色や個性を出すことができる点が、クラフトビールの魅力だと語る豊村さん。原料の個性によって飽きの来ないビールをつくることができ、「クラフトビールに注目してくれるとうれしい」という。さらに「田舎だからできることがある」と話す。他の地域を知って、自分の地域の良さを知る。田舎には、

都会にはない人の循環が成立しているのでは、と考えさせられた。

彦根麦酒が人とのつながりを大切にしてきたのと同様に、彼女も「一人一人の意見を大切にしたい」と話す。個性というものは人間だけではなく、土地や地域にも存在している。しかし、ここがクラフトビール作りに適しているから、この事業を始めたわけではない」と話されたように、目に見えるような個性だけにとらわれてはいけない。多くの人と対話を通して個性を認識し、それを地域に還元する。豊村さんが、クラフトビールの魅力の一つは「飲むことでコミュニティケーションできること」だと考えるように、人と関わることは重要である。将来、彦根麦酒が大切にしている滋賀の個性や魅力が、県内のみならず県外にも普及していくのだろうと感じた。

## 株式会社彦根麦酒 豊村 美久さん

彦根市出身。長年大阪で勤務していたが、リターンし、彦根麦酒の営業ディレクター、プルワーとして働き始めた。現在は、SDGsの一端であるフードロス削減や、麦芽かす活用の仕組みづくりに積極的に取り組んでいる。



## 取材者

高田 元貴 (滋賀大学 3年生)  
中田 名帆子 (龍谷大学 1年生)  
市田 暉昂 (立命館大学 3年生)

バイオの力ではじまる

# 資源循環サイクル

バイオ（微生物）による発酵技術で約90%の生ごみを消滅。  
生ごみ処理の様々な問題を解決できます。

## バイオパワーで地域内資源循環

～ヌーボー菌が地域、日本の農業を変える！？～



株式会社バイオセラー

取材・記事/Team5 窪田 真那・崔 夢凡・植本 翔太

私たちの生活水準は年々向上し、新鮮な野菜や肉・卵・牛乳などの農産物の需要が徐々に高まってきている。一方野菜の葉っぱや果実、家畜の糞尿など、年々大量に発生する農業廃棄物は早急に処理する必要がある。「もったいない」のない世界を実現するために、これらの生ごみや農業廃棄物をどのように処理すればよいのだろうか。

この疑問を持ちながら、生ごみを独自のバイオ菌で分解する生ごみ処理機を製造、販売している株式会社バイオセラーの鈴木さんにお話を伺った。インタビューを通して、同社の持続可能な責任あるビジネスへの情熱や、生ごみを堆肥にすることが土壌の改良、作物の栽培に役立ち、食料自給率の向上や「カネ、モノ」の地域内での循環を知ることができた。

### 生ごみを宝にする

#### 「魔法の武器」

バイオセラーは当初、菌を製造する会社で、取引先企業から「浄化槽の匂いで困っている」という相談を受けたことがきっかけとなり、浄化槽だけでなく、もっと幅広く社会に貢献していく活動を試行錯誤していくうちに今の形態となった。

改正食品リサイクル法により廃棄物を様々な用途に高い割合で再循環させていかなければならなくなった食品関連の企業にバイオセラーの商品は欠かせないだろう。特に着目し

たのが、堆肥化までの時間短縮だ。自然発酵を利用して堆肥化を進めるには3か月もの間置いておく必要がある。しかし廃棄物は日々発生していく一方であり、中には「一日に10トンの廃棄が出る食品加工場もある」と鈴木さんは話す。同社の機械の導入により、廃棄費用の軽減ができ、さらに環境に配慮した取り組みを行っていることをアピールできる。また、牧場で発生する牛糞を主とした廃棄物は、通常であれば発酵させるまでに3か月程度かかり、動物のストレスに対する配慮が必要なことから、堆肥化のために追加でスペースを確保しなければならなかった。堆肥化進度の管理という追加の負担まで発生してしまうため、SDGsを謳いながら従事者を苦しめるという悪循環を生み出してしまっているのだ。廃棄物のうち堆肥へと循環できるものの割合が低くなってしまっことは避けることはできない。そこでバイオセラーの機械を導入することで、最短24時間から堆肥化が可能であるため、大幅にその時間を短縮でき、職場環境を改善できるため、これまでの悪循環を良い方向へ変えることができるのだ。

## 「発酵」させる ヌーボー菌で地域を

バイオセラーの「ヌーボー菌」は、自然から採取した幾つかの好気性、通性嫌気性細菌で構

成されている複合菌で、それぞれが強力な分解酵素を持つ。処理機は約80%の生ごみを分解でき、残りが残渣として排出される。この目立たない残渣を堆肥、牛糞発酵促進剤、土壌活性剤などに分類させ、農家や牛舎に無償提供している。このように牛糞処理問題を改善し、農家からは「実の付き方がいい」「よく作物が育った」などの声もあるという。そして、他の企業と連携して、堆肥を通して農家と畜産家との距離感を縮めたり、多くの人を巻き込み、コミュニケーションの機会を増やすことで、地域活性化を促進している。

バイオセラーは食品リサイクルの循環の実現に向けて、使命感を持って重要な担い手の一角として歩んでいる。

## 今後の展望

日本では食料自給率の低さが非常に深刻な問題である一方、大半を輸入に頼っている化学肥料の高騰で農家は打撃を受けている。そこで有機農業が注目されている。バイオセラーの生ゴミから生成した堆肥を利用した有機農業が今後、必要となってくる。「社会でバイオセラーの技術がより必要とされるものになるために、ゴミ焼却時のCO2を排出しないことを積極的に発信することやバイオパワー（バイオセラーが使っているヌーボー菌で生ごみを処理する能力）で生成された農作物が美味しいという好事例集を増やしていくことが大切」と鈴木さんは話す。

最後に、若者へ向けてのメッセージを聞くと、「世界的に環境への意識が高まっていて、その意識を自分ごと化することが必要です。私たちも若者に向けて、発信していきます」と熱く語ってくれた。

### 株式会社バイオセラー

2017年創業/従業員10名/滋賀県草津市

業務内容：生ごみを処理し、処理後にできた堆肥を畑に戻して、作物を育てる資源循環サイクルが可能な業務用の生ごみ処理機—バイオパワーの製造販売を行っている。



# BIOSELLER



### 取材者

窪園 真那 (立命館大学 2年生)  
 崔 夢凡 (龍谷大学 2年生)  
 植本 翔太 (立命館大学 1年生)





# 琵琶湖にしかない風景をいつまでも

～琵琶湖の中から淡水の暮らしを届ける～



## フィッシャーアーキテクト

取材・記事/Team6 戸廣 紗弥香・藤枝 樹亜

強い日差しが差し込む9月初旬、大津市の琵琶湖で漁業をされている駒井健也さんを訪ねた。駒井さんは志賀町漁業協同組合にて3年間の研修を経て、2020年に独立しエリ漁で湖魚を獲りながら加工食品事業や漁業体験事業などを行っている。エリ漁とは、琵琶湖の伝統漁法であり、障害物にぶつかるとそれに沿って泳ぐ魚の習性を利用し、湖岸から沖に向かって矢印型に網を設置する。今回のインタビュアーは、駒井さんが琵琶湖の漁師になろうと思ったきっかけや想い、現在行っている事業について、そして今後の展望についてお話を伺った。インタビュアーを通して、琵琶湖のことを知ってもらいたいという熱い気持ちを持ち続ける大切さや琵琶湖にしかない景色を守り続けるために今できることは何かを見つめ直す必要性を知ることができた。

## 漁業との出会いと独立

現在フィッシャーアーキテクトの代表を務める駒井さんは、滋賀県で生まれ育ち、学生時代に国内外の多くの場所を巡る中で琵琶湖の素晴らしさに気づいた。特によく訪れたのが、日本で唯一、人が住む淡水湖上の島である沖島。漁師を生業とする住民がいることを知り、それだけ豊かに漁ができる琵琶湖がさらに魅力的に見えたという。一方で、漁業就業者の高齢化や外来種の繁殖などが原因で漁獲量が減少している

ことを受け、琵琶湖にしかない美しい風景が失われつつあることも実感した。このような経験から漁師に憧れ、琵琶湖にて3年間の研修を積んだのち、独立しフィッシャーアーキテクトを立ち上げた。「独立してすぐは親方ありきでやっていたことを一人でやらなければいけないことがとても大変だった」と語る駒井さん。フィッシャーアーキテクトでは伝統漁法のエリ漁を軸に漁獲から加工、販売まで手がける。他にも漁業体験ができる「BI・WAKE UP」や琵琶湖と共にある仕事を通じて景観づくりを行う「BIWACO・WORKS」というように、漁だけでない幅広い活動を通して、琵琶湖から淡水の暮らしを届ける活動を行っている。

## 琵琶湖を感じる体験を

フィッシャーアーキテクトの取り組みとして、夜明け前から漁と漁後の暮らしまでを体験できるコースや、初めての方におすすめの琵琶湖へ出て漁業を知ることができるコースなど、様々な漁業体験を行っている。「当初は参加者の呼び込みのため、ウェブサイトを開設したが、うまく広報につなげることができなかった。」と振り返る。広報を打つなど様々な方法を試していく中で、参加者も増えてきた。参加者の中には、これまで駒井さんが参加してきたマーケットで交流のある方もいるなど、異なるコミュニケーションの方が繋がる瞬間だと感じた。ま



写真左前:グラスファイバーを使用した筒

写真左奥:筒に引っ掛ける縄

写真中央:たつべ漁で使用する籠(主にエビを獲る)

写真右奥:はえ縄漁で使用する縄(主にうなぎを獲る)

た、これらの体験だけでなく、獲れた琵琶湖の魚を加工し、オンラインにて商品販売を行っている。琵琶湖の旬を届ける淡水魚セットや鮎のかりんとうなど、食を通して、琵琶湖の魚を存分に楽しみなが感じることができ

## 学び合い、繋げる

漁師になる前に琵琶湖の様々な漁師の話聞いて、エリ漁を軸にすることを選んだ駒井さんは、漁師になってからも学び合いを大切にしている。「場所や漁師、漁を行う規模などによってスタイルがそれぞれ違うのが面白い。先月も沖島に行ってきたところですよ」と語る。ま

## フィッシャーアーキテクト

### 駒井 健也さん

琵琶湖で一番の湖岸線をもつ、志賀町漁業協同組合の親方に弟子入りし、3年間の研修を経たのち、エリ漁を引き継ぎ独立。現在は、研修の受け入れや漁業体験など様々な事業に取り組んでいる。



た、駒井さんは自らが学びを得るだけに止まらず、学びを届ける立場にも立つ。駒井さんは独立からわずか2年にして、フィッシャーアーキテクトとして、研修の受け入れを始めたのである。「みんなに琵琶湖を知ってもらいたい」インタビュを通して琵琶湖を愛する熱い想いが伝わった。琵琶湖の漁師として、漁だけに留まらずさまざまなことに取り組む駒井さんの今後に注目していきたい。

## 取材者

戸簾 紗弥香(龍谷大学4年生)  
藤枝 樹亜(立命館大学2年生)

# Interview

## 参加学生の声

プログラムに参加した学生メッセージ

※一部抜粋



滋賀大学1年生  
宇都宮 和

私は、本プログラムで記事を作成する際、読者に興味を持ってもらえたり、最後の一文まで読んでもらえたりするような見出しや文章を考えることは、決して簡単なことではないのだということを改めて感じました。たった一度の経験では、自分が見聞きした出来事やその時自身が感じたことや学んだことを、写真と自身の語彙力のみで表現することはできません。しかし、この経験を通してより一層デザインや文章校正技術を学びたいと強く感じるようになりました。それだけでも、今回の経験は私にとってとても重要で意義のあることだと思います。

まず、このプログラムに参加して、大学、専攻、または学年の異なる学生たちと出会うことができるとてもうれしかったです。チーム1の皆さんには取材記事の作成や報告会の発表などを色々助けられて心から感謝しております。一番印象に残ったのは毎回のグループワークです。そのたびに、みんな自分の意見をシェアしたり、検討したりしていて、「ああ、こういう考え方があった」といつも驚きました。いろいろ勉強になって、夏休みのいい思い出になりました。



立命館大学3年生  
帥 霊



立命館大学1年生  
梅田 凜基

グループの人との連携が重要であると学びました。自分は合宿と取材日が重なり、取材に行くことができませんでした。代わりに、事前学習や記事作成に奮闘しました。取材に行くことができなかったため、記事を書く時に録音データを用いて書きました。しかし、実際に取材に行かないとわからない部分もありました。インタビューに答えてくださった方の表情、心情、店の雰囲気などです。そういう部分を取材に行ったグループのメンバーに聞き、細部まで理解をして記事を書くことに専念しました。このことは自分一人だけでは不可能なことで、グループの仲間との協力で成し遂げることができました。

興味を持ったことに対し、自ら飛び込めたとすることは、少しではありませんが自信へと繋がりました。その中で、他の大学の方との関わりやワークショップ、フィールドワーク等を通して、自身とは異なる考えにも沢山触れることができました。今までは、物事に対し、1人で熟考することが多かったため、気づけば考えに偏りがでてしまうこともありましたが、このプログラムを通して、多くの人と関わり、考えを共有、尊重、吸収することの大切さ、また、そこから自身の考えを深めていくことの大切さを学びました。



立命館大学2年生  
塩原 和華



滋賀大学1年生  
佐藤 龍斗

1番の学びは地元滋賀のために頑張っている企業を知ることができたということです。今回のプログラムに参加していなければ私達が作成した記事の企業を知ることが一生なかったと思います。本当にこの出会いに感謝したいです。今回の活動を通じて思ったことは、日本にある地元のために活動している企業をもっと知りたくなったことです。大学生は時間があります。こんなに時間を自由に使えることはこれからもうないと思うので、時間を有効に使って全国にある地元の人にも知らないようなマニアックな企業を見つける旅に出たいと思いました。

今まで自分の意見や考えたことを、誰かに伝えるということがなかなか出来ず、消極的でした。しかし、このプログラムに参加することで、色々な考えがありそれが良いことなのだ気づくことができました。そこからは考えを話すことが出来るようになりました。その時、自分の考えを言葉で相手に伝えることがこんなに難しいことなのだ改めて知りました。SDGsという言葉も内容も知っているつもりでしたが、その中身まで考えられていなかったことに気づかせられる良い経験になったと感じました。



龍谷大学1年生  
占野 友梨佳



聖泉大学1年生  
中野 葵士

私が今回のプログラムに参加して学んだことは他者が持つ考え方についてです。その中でもワークショップでは私にはない意見が多くありました。例えばシンプルに考えた主観的な意見から専門的な知識で根拠を照らしながら考える意見などがあり、そんな考え方があるのかと圧倒されるものばかりでした。伝える言葉がシンプルだと意見の交換がスムーズで、根拠があると相手も納得しやすく、そこから自分でも考えを発展させることができました。今回の体験は私自身の成長になりました。これからたくさんの人と交流していこうと思いました。

他の大学生の方と一緒にSDGsの問題や解決策を話し合える機会があったことで、自分にはない柔軟な考え方や新たな切り口を学ぶことができました。その中でも付箋をはりながら話し合いを進めることでスキーマが働きやすくなりました。自分が良く知っている分野を広げると同時にあまり知らないところも付箋を繋げて全体像を把握することでより理解を深めることができました。具体的に人との繋がりという点でほとんどSDGsの項目が関わっていることに気づき、独立していた項目というのは最後には循環しているように感じました。



聖泉大学1年生  
東 将大



立命館大学3年生  
市田 暉昂

プログラムに参加して、他者と議論することの楽しさを改めて発見することができました。プログラムに参加する前の自分は、自分の考えに反する意見はあまり聞こうとせず、自分の意見をただ言うだけか、全く自分の意見を言わず、話し合いに参加しないかのどちらかをしてきました。

しかし、このプログラムの中で他者と議論やグループワークをすることで、全く違う価値観に触れることで、自分の価値観がより深いものになるだけでなく、議論を通してより良いものを生み出すことができることに改めて気づきました。

SHIGA SDGs Studios+(PLUS)2022のプログラムで様々な大学、学年の人との関わりを通して、多様な価値観や考え方に触れることができる貴重な経験になりました。「琵琶湖から考える滋賀の食と地産地消」のテーマでのグループ活動を通して、1つの目標に向かって作り上げる大切さを体感することができました。この経験を今後活かしていきたいです。

余談ですが、小さい頃に、滋賀県へ旅行やキャンプにたくさん訪れていた頃を思い出し、滋賀県の良さを再認識しました。



龍谷大学1年生  
中田 名帆子



滋賀大学3年生  
高田 元貴

自分が持っているリーダーとしての可能性に気付くことができました。今回のように出身や年齢、大学まで異なる参加者とチームを組んで活動するのは初めてであり、不安を感じていました。しかし、自然発生的にリーダーとしてメンバーに方向性を共有したり、メンバーを引っ張ったりすることで、チームの結束感を高めることができました。これまでは1人で考えて行動することが多かったですが、この活動を通じて自分にも人を導ける素質があるということに気付きました。今後は他者からの提案を受け入れるだけでなく、自分から人に影響を与えられるように努力したいと感じました。



立命館大学2年生  
窪園 真那

滋賀県には多くの魅力があり、それは滋賀県の大切な資源であると感じました。しかし、同時にその地域資源に価値を見出すことができていない場合が多いことも感じました。まずは地域の人々がその価値を再認識することが必要だと思います。そのための一つの方法として、今回のプロジェクトのような、学生が地域の人々取材し、発信することは非常に有意義だと感じています。これからも地域の魅力を発見・発信し、価値を見出すことに貢献していきたいです。

SDGsについて企業の間でPRの為なのか社会的責任からなのか分からないが、取り組もうという意識があるという点がいいことだと思いました。大きい組織が動いてくれることによって自分たち個人も流されやすいので、このいい流れが続けばと思いました。成果報告会では特にグループワークが印象的でした。解決案を出した時、相手から反論をもらって別の視点の考え方を知ることができた気がします。価値観の交流が出来たというのが自分にとって大きな成果でした。



立命館大学1年生  
植本 翔太



龍谷大学2年生  
崔 夢凡

今回のSHIGA SDGs Studios+(PLUS)2022プログラムに参加させていただきありがとうございました。このプログラムでは、参加者の私たちの大学や学部、学年さらに国籍が異なりますが、持続可能な社会を実現するという同じ志を持っています。滋賀県を起点に、SDGsの視点で社会問題を発掘・解決し、企業や個人にインタビューを行い、情報を発信する楽しさ、記事を書く楽しさを体験しました。それだけではなく、近江商人の「三方よし」と琵琶湖版SDGsである「MLGs」も学びました。約2ヶ月の活動を通して、持続可能な社会の実現や持続可能な開発目標の到達の要件において、先進な技術、循環経済やグリーンエネルギーの開発はもちろん大切ですが、人との繋がり、思いやりと責任ということも無視できないものだと強く感じました。

## 長浜バイオ大学 市民土曜講座

地域連携・産官学連携推進室 | 9/17・10/15・10/22

長浜バイオ大学の特色を活かした公開講座を実施しています。2022年度では5年目となり、年間約300名の地域住民の皆様へ受講いただいております。2022年度は全3回の予定で長浜バイオ大学会場で実施しています。



びわ湖東北部地域連携プラットフォーム事業



## 滋賀文教短期大学 ぶんぶんひろば

子ども学科・学務課

5/18・7/13・8/20・10/5・11/16・12/10・12/14

地域にお住いの乳幼児とその保護者を対象に、「ぶんぶんひろば」を開催しています。学生が考えた遊びや催し等を通して、地域の子どもたちとふれあえます。保護者への子育て支援活動、地域貢献の場、そして学生の実践的な学びを深める場として、年8回程度開催しています。新型コロナウイルスの感染対策として、今年度は完全予約制、検温等の実施を徹底して開催しています。



公式サイト▼  
<https://bit.ly/3rDF3y7>



## 滋賀大学

### サステナウィーク

地域連携教育推進室

SDGsを探究し、実践する授業プログラム（プロジェクト科目）をコアに、学生と教職員による実行委員会でSDGs理解をテーマにしたイベントを行います。暮らし協けられる、働き続けられるといった、持続可能な社会づくりに向けた様々な実践企画を、学生主体で地域と連携しながら実施します。



2022.  
11.21~  
11.25  
開催予定

## 滋賀県立大学

### キャンパスSDGsびわ湖大会2022

地域共生センター

SDGsに取り組んでいる学生、SDGsに関わる団体が活動について報告し、情報共有を図り、ネットワークを広げる交流イベントです。2022年度もびわ湖東北部地域連携協議会との共催で実施し、基調講演をはじめ1週間にわたりSDGsイベント、ディスカッションなどの学生企画を実施します。



2022.  
11.5~  
11.11  
開催予定

びわ湖東北部地域連携プラットフォーム事業

## 聖泉大学 彦根市消防団機能別分団

総合企画課・地域連携交流センター | 5/22・8/27・1/7

聖泉大学は2019年4月より彦根市消防団機能別分団（学生団員）として、防災訓練や啓発活動に参加しています。今年度、新たに2名の学生が入団し、団員数は11名になりました。今年度参加した彦根市防災訓練では、地域にお住いの方々と協働し避難所設営訓練を行いました。今後も災害に強いまちづくりを目指し、防災活動、防災啓発活動に積極的に参加していきたいと考えています。

びわ湖東北部地域連携プラットフォーム事業



## びわこリハビリテーション 専門職大学

学生支援グループ・総務グループ

加齢による認知機能の維持・改善に向けた頭と身体を使ったコーディネーショントレーニングや運動機能が低下するフレイル予防のための運動機能の維持・改善と栄養指導を地域住民の皆様へ実施しています。地域在住高齢者の健康維持に関心のある学生がボランティアで事業に参加し、教員と共に体力測定や健康体操等に参加する中で、生活維持のために必要な身体機能とは何かを考えるきっかけとなっています。

## いきいき生活プロジェクト ~頭と体のリフレッシュ~



公式サイト▶ <https://bit.ly/3yp3X8k>



biwa.jp

## 成安造形大学 資源リサイクルワークショップ

未来社会デザイン共創機構 | 8/18

子ども向けの「夏休み・資源リサイクル講座」として近江八幡市でワークショップを開催。子どもたちのゴミについての意識を楽しく高めることを目指し「レジンでつくるおかしな(お菓子な?)キーホルダー」を作ってもらいました。キーホルダーづくりの材料は、子どもたちがそれぞれ持参した食べ終わったお菓子の袋です。普段なら捨ててしまうお菓子の袋がキーホルダーとして生まれ変わりました。身近なゴミの新しい発見や、ゴミの向き合い方が変わるきっかけとなれば幸いです。



公式サイト▼  
<https://bit.ly/3FH6NPA>

SHIGA

# 環びわ湖 大学SDGsマップ 2022

## 滋賀短期大学

滋賀県漁業協同組合連合会と  
「湖魚を使った学校給食レシピ」の制作

### 生活学科

滋賀県漁業協同組合連合会と本学生活学科の給食経営管理実習にて、滋賀県の「びわ湖の魚を学ぶ学校給食連携促進事業」の一環として『湖魚を使った学校給食レシピ集』を学生たちが制作しました。制作したレシピ集はお子様にも食べやすいよう工夫しており、滋賀県内の各市町の給食担当者に湖魚食材に関する栄養成分やレシピ等の情報提供として案内されます。『レシピ集』は滋賀県漁業協同組合連合会ホームページで公開中です。



公式サイト▼  
<https://bit.ly/3T84Vyo>



## 龍谷大学

龍谷大学SDGs宣言 -仏教SDGsの推進-

龍谷大学は、「浄土真宗の精神」を建学の精神とする大学として、「仏教SDGs」の理念を掲げて、SDGsの達成に資する取り組みを推進してきました。阿弥陀仏が「すべての生きとし生けるものを決して見捨てない」と誓われた心、すなわち「摂取不捨」の心と、SDGsが掲げる「誰一人取り残さない」という理念と共通点を見出し、この仏教的な視点を通して大学構成員自らの自覚と気づきを促す、それが、本学が掲げる「仏教SDGs」です。この「仏教SDGs」という本学独自の視点を踏まえ、学内外の知恵を結集し、持続可能な社会の実現に向けた取り組みを開始しています。その取り組みを具現化するため、「龍谷大学 SDGs宣言」を发出了しました。HPでは、本学における取組体制の他、様々な取り組みを掲載しています。



公式サイト▼  
<https://bit.ly/3enb3bz>

## 立命館大学

立命の家2022

立命の家実行委員会(学生団体)・BKC学生オフィス | 8/22・8/23

「立命の家」は、学術系サークルやプロジェクト団体が日頃の活動の成果を地域に還元する取り組みです。毎年夏休みに開催し、プログラミング体験や工作、科学実験など、地域の小学生に楽しんでもらえるような企画を実施しています。2022年度は対面・オンラインの両方で企画を実施し、2日間では175名の小学生が参加しました。



公式サイト▼  
<https://bit.ly/3fW1GUu>

## びわこ学院大学

わくわくフェスタ2022

### 学生支援課

「わくわくフェスタ」は、地域の子どもたちに遊びと学び体験の場を提供しているイベントです。子どもも学科も、2年生が授業の一端で取り組んでいるもので、学生たちにとっては、大学で学んだ知識や技能を活かす貴重な機会になっています。コロナ禍ですが、今年度も感染防止対策を十分にとり、ワークショップやアトラクションなど7ブースで親子が安心して楽しめる場にしたいと考えています。



公式サイト▼  
<https://bit.ly/3emsioe>

2022.  
11.3  
開催予定

一般社団法人  
環びわ湖大学・地域コンソーシアム

大学名 ... 加盟校  
県市町 ... 加盟自治体

<https://ka>

## びわ湖東北部 地域連携協議会

びわ湖東北部地域の大学・短大・自治体・経済産業界等が、SDGsを活用し、力を合わせて地域の課題解決や魅力と活気ある地域社会の創出を目指したプラットフォームです。「産業振興に向けた産官学連携」「地域コミュニティの活性化」「地域を担う次世代人材育成」の3つのワーキンググループを形成し、産官学協働で事業を推進しています。

公式サイト  
www.bh-cc.jp/



### 協議会5大学

#### 近江でのSDGsの実践

SDGsや地域課題をテーマとし、協議会加盟大学から講師を派遣し滋賀県内の大学生の教育環境の充実を図るための共同科目を開講します。本科目では、SDGsとは何かを学び、17個の目標とその目標達成への実践例なども学ぶことでSDGsへの理解を深めます。また、SDGsでの目標を近江の地で実践していくためにはどのような行動計画を立ててどのように実践していけば良いのかを、グループワークを通してそれぞれが考え、それを皆で共有することで、将来の持続可能な社会の構想実現に寄与するための足がかりを得ることを目標としています。



### そのほかのSDGsへの取組

#### 成安造形大学

#### 健康増進キャンペーン 啓発ポスター制作

未来社会デザイン共創機構



滋賀県国民健康保険団体連合会とのコラボ企画で、毎年、学内で「健康増進キャンペーン啓発ポスター」のコンペを実施しています。健康増進月間の期間中、滋賀県内各所で掲出されます。



公式サイト▶ <https://bit.ly/3MfY9DU>

#### 滋賀県立大学

#### スチューデントファーム「近江菜座」

地域連携・研究支援課 | 通年実施



地域貢献を目的とする学生主体のプロジェクトを大学が支援する教育プログラムです。毎年、学生主体の地域活動を募集し、所定の審査を経て、プロジェクトとして採択されます。学生が地域の課題に地域の方々と一緒に取り組み、その解決を目指しています。

公式サイト▶  
<https://bit.ly/36X1w6>



#### 龍谷大学

#### 環境省との協力連携「地域脱炭素の推進に関する協力協定」を締結 —環境省と滋賀県が主催するシンポジウムでも意見交換に参加—

世界各国が2050年までのカーボンニュートラルの実現をめざすなか、日本は、「2050年に脱炭素社会の実現をめざす」ことを宣言しました。龍谷大学は、創立400周年を迎える2039年を見据えた長期目標の一つとして「社会変革の中核的担い手となる」ことを掲げ、カーボンニュートラルを先導する大学としての決意を国内外に表明するため、2022年1月に「龍谷大学カーボンニュートラル宣言」を发出しました。そして、脱炭素社会や地域循環共生圏の実現に寄与するため、環境省との連携協力体制の構築として、2022年4月25日、「地域脱炭素の推進に関する協力協定」を締結しました。2022年5月7日(土)には、滋賀県庁にて「地域の脱炭素社会の実現に向けた環境省と滋賀県によるシンポジウム」が開催され、第2部:「環境政策にかかる全国行脚(滋賀県)意見交換会(環境省主催パネルディスカッション)」に、地元団体を代表して、本学から深尾 昌峰 副学長(社会貢献・SDGs担当)が登壇し、本学の取り組みを紹介しました。



公式サイト▶ <https://bit.ly/3y5W4I>



## 授業・研究でのSDGsへの取組

### 成安造形大学

### プロジェクト授業

未来社会デザイン共創機構「近江里山フィールドワーク」



里山における人と自然の関わりについて学びます。里山での暮らしを知るフィールドワークを通して、未来における自然との関わりについても考察します。大津市仰木地区の住民で組織する棚田保全団体の指導のもと、棚田保全活動を行います。また、今森光彦先生が所有する里山にて、里山環境整備など実践を通して、里山に対する理解を深めています。

未来社会デザイン共創機構「ちま吉プロジェクト」

大津には、約400年の歴史を持つ「大津祭」という祭があります。「ちま吉」は大津祭を支えるNPO法人大津祭曳山連盟の公式キャラクターとして2007年に本学学生がデザインしました。それ以降15年間「ちま吉」のキャラクターデザインを使用した告知広報活動を、学生の手で企画・デザイン・制作してきました。アイデアを練り、子どもたちや地域住民の皆様に向けた活動を展開しています。



### 聖泉大学

#### 多文化共生・国際理解教育プロジェクト

人間学部 森研究室

主に彦根市を中心とした湖東地域において、多文化共生や国際理解をテーマとする講座やワークショップ等を実施しています。具体的には地域内の小中高校への出前授業、各種イベントへのボランティア参加などを通じて、地域の多文化共生や異文化理解の推進を目指しています。(彦根市から委託事業を受託)



#### 十人十色プロジェクト

性の多様性を知ってもらおう!

人間学部 准教授 富川 拓

彦根市が令和3年度にパートナーシップ宣誓制度を導入するのに合わせて、周知啓発活動に取り組んできました。意見交流会、FMラジオの番組制作、研修会・公開講座の企画運営、市内企業の実態調査等を聖泉大学と彦根市との協働で行い、ジェンダー平等の実現を目指しています。



公式サイト▼  
<https://bit.ly/3VfBYeI>



#### 帯祝いの会&オレンジリボン運動 in 多賀大社

別科助産専攻



安産祈願に來られた妊婦の方とご家族や一般参拝の皆様、子どもの虐待防止啓発運動であるオレンジリボン運動を実施しました。妊婦様やご家族に対しては、腹帯の巻き方をお伝えすると同時に、ご自身の環境での子育ての課題を認識するきっかけづくりとして「育児の認識

チェックシート」を体験してもらいました。その他、参拝に來られていた方々に対しては、赤ちゃん人形の抱っこ体験をしてもらいました。



#### 助産学生によるパパママクラス

別科助産専攻

夫婦で協力し合いながら妊娠出産・育児をのりこえていけるきっかけづくりを目的に、助産学生によるパパママクラスを開催しました。クラスでは「パパの妊婦体験や赤ちゃん人形の抱っこ体験」「家事・育児見える化シートの記入」「産後のママとパパのうつについて」「パパの沐浴体験」など、楽しく夫婦で話し合い、体験できる内容を準備しました。参加された方は出産後のイメージが付き、これからの育児期を前向きにとらえていただけたようでした。



公式サイト▼  
<https://bit.ly/3CFEpf1>





# Message

滋賀県知事と今回のプログラムで講師を努めて  
いただいた皆様よりメッセージを頂きました

このたび、皆さんが大学や専門性の垣根を越えて、SDGsの視点を発見・発信する「SHIGA SDGs Studios+(PLUS)2022」に取り組み、このブックレットを発行されたことを心からお慶び申し上げます。大学の垣根を越えて交流した仲間と共同で未来に向かって地域のために何かを作り上げたという経験は、皆さんのこれからの人生の何よりの財産になるとともに地域にとっても大きな宝になるものです。

本県は「三方よし」や「せっけん運動」に代表されるように、昔からSDGsに合致する精神が息づいており、滋賀県版アクションとしてMLGsにも取り組んでいます。次世代を担う皆さんにその精神が脈々と受け継がれ、実践されていることを滋賀県知事として大変嬉しく、そして頼もしく思います。

去る11月12日に「SDGs全国フォーラム2022 滋賀・びわ湖」が本県で開催され、次世代を担う若者をはじめとする多様な主体がそれぞれの取組を広く発信し、SDGsの達成に向けた社会変革につながる取組を創出する機会となりました。

これを契機に、SDGs達成に向けた取組を更に推進し、滋賀県基本構想で掲げる「未来へと幸せが続く滋賀」を目指していきたいと考えているところです。

皆さんが今回の活動で得た貴重な経験を活かして、引き続きSDGsの達成に向けた活動に取り組んでいただくことを大いに期待しています。

## 三日月 大造 滋賀県知事



「SHIGA SDGs Studios+(PLUS)2022」での活動お疲れ様でした！SDGsのレクチャー、沖島でのフィールドワーク、そして、自分たちの興味・関心でグループを作り、滋賀県内のSDGsに取り組む事業者などへの取材と記事にまとめる活動に発表と大変な活動だったと思います。今年度は、2020年度・2021年度のプログラムとは異なり、対面を中心としたプログラムを実施をすることができたこともあり、環びわ湖大学・地域コン

ソーシアムに加盟する大学に所属する皆さんが学部・学年を超えた密なコミュニケーションの機会がとれたと思います。さて、SDGsの達成期限とされる2030年まで残り半分ほどになり、いよいよ持続可能な社会の実現に向けた具体的なアクションが必要になってきます。今回参加された皆さんが社会をより良い方向に変える人となり、周りの人が積極的にSDGsに関わってみたいくなるようなリーダーになることを期待しています。

SDGs レクチャー講師

## 上田 隼也

一般社団法人  
インパクトラボ  
代表理事



地域での活動が本格的に再スタートした2022年のプログラム。

受講生の皆さん、いかがでしたでしょうか？

今年度の環びわ湖学生支援事業は、コロナ禍で過去2年間対面での開催ができなかったことを考慮し、できる限り対面でのコミュニケーションを重視したプログラムの設計となっております。

今回のプログラムで私自身は、沖島でのフィールドワークと最終成果報告会で皆さんと一緒にさせていただきました。そこでの参加者の皆さんの印象は、行儀が良く大人しい印象でしたが、グループワークの際には対面でのコミュニケーションがとても丁寧だと感じました。最後の振り返りでも、チェックイン（ワークショップ導入のアイスブレイク）やグループディスカッションで、受講生の皆さんが一人ひとりの意見を丁寧に聞く姿勢ができていた結果、全員が居心地の良い本音で語り合える場になっていたのではないのでしょうか。

誰も取り残さない活動の姿勢ができて皆さんの今後の活躍を期待しています。

1DAY フィールドワーク講師

田口 真太郎

成安造形大学  
未来社会デザイン共創機構  
助教



かんびわ

検索

<https://www.kanbiwa.jp/>



## SHIGA SDGs Studios +(PLUS)Booklet 2022

びわ湖から考える、滋賀の食と地産地消

2022年12月 発行

発行所 一般社団法人 環びわ湖大学・地域コンソーシアム

滋賀県大津市末広町1番1号日本生命ビル4階

発行者 理事長 仲谷 善雄

編集 藤枝 樹亜（一般社団法人インパクトラボ）

戸簾 紗弥香（一般社団法人インパクトラボ）

©Copyright 2022 一般社団法人 環びわ湖大学・地域コンソーシアム / 一般社団法人インパクトラボ

本誌に掲載されている記事の無断転載を禁じます。すべての著作権は、記事執筆者またはその情報提供者に属します。本誌の無断複写・複製は、著作権法上の例外を除き禁止です。



環びわコンソーシアムは 持続可能な開発目標(SDGs)を支援しています